

平成 30 年 6 月 16 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26861924

研究課題名(和文)NICUに入院した子どもをもつ母親への次子妊娠に関する情報提供冊子の開発と評価

研究課題名(英文)Development and evaluation of the nursing care about the subsequent pregnancy to mother that a child was hospitalized in NICU

研究代表者

船場 友木 (funaba, yuki)

広島大学・医歯薬保健学研究科(保)・助教

研究者番号：70582378

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、NICUに入院した子どもをもつ母親の身体的・心理的特徴を踏まえた、次子妊娠に関する看護支援を開発・評価することを目的とした。本研究で開発した看護支援を実施する群と、従来施設で実施されていた家族計画支援を行う群に分けた。質問紙調査およびインタビュー調査で評価を行った。本研究で開発した看護支援を受けた群は従来の支援群と比較して、決定の段階、医学的情報の入手、情報を活用した意思決定において、得点が上昇する傾向がみられた。本研究で開発した看護支援を行うことで、母親が次子妊娠について考え始めた際に出てきた気がかりを解決するために必要な情報を入手し、活用していく力が高まる可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop and evaluate nursing support about the subsequent pregnancy based on the physical psychological characteristic of mother who had a child hospitalized in NICU. The participants were divided to one group that carried out the nursing support developed in this study and another group that carried out in facilities in before. Participants answered the questionnaire survey and an interview investigation. The tendency that the stage of decision making score, obtaining of medical knowledge score and the decision-making score that utilized information in comparison with conventional support group rose to was seen in the group which received the nursing support that I developed in this study. The nursing that I developed in this study was what I supported and obtained information necessary to solve the anxiety that came out when mother had begun to think about the Tsugiko pregnancy, and the possibility that the power that I utilized increased was suggested

研究分野：母性看護学

キーワード：NICU family planning

1. 研究開始当初の背景

一般的に夫婦の次子妊娠の決定には、子どもの数や家族の健康状態、経済状況などが影響を与える^{1,2)}。助産師は、夫婦が適切な時期に次子妊娠を計画でき、望まない妊娠を防ぐために、産褥入院中の母親に母体の回復過程や避妊方法などの情報提供を主とした家族計画支援³⁾を行ってきた。

一方、Neonatal Intensive Care Unit (NICU) に入院した子どもをもつ母親の次子妊娠の決定には、辛い思いをくり返す恐れ、妊娠合併症をくり返す恐れ、家族の反対、NICU に入院した子どもを育てながら次子をもつことへの負担感が影響を与える⁴⁻⁶⁾。そのため、NICU に入院した子どもをもつ母親に対して、これまでのような予期せぬ妊娠を防ぐことに主たる目的がおかれた支援だけでは不十分と考えられた。

申請者らは母親への支援の示唆を得るために、NICU に入院した子どもをもつ母親が次子妊娠を決意する過程での体験を明らかにするために、面接調査を行ってきた。その結果、母親は次子妊娠に同じような不安をもつ母親の体験談や妊娠合併症に関する医学的な情報を必要としていた。しかし、母親は情報を入手するためにインターネットや友人など様々な情報源へのアクセスをおこなったが、その情報の信憑性に不安を抱いたことを語った。NICU に入院した子どもをもつ母親の身体的・心理的特徴をふまえた情報提供の充実の必要性が示唆された。しかし、これまで面接調査を行ってきた母親は NICU 退院後子どもが順調に成長発達している母親が主であった。近年 NICU 退院後に医療的ケアを必要とする子どもの数が増加傾向にある。NICU 退院後に医療的ケアなど特別なニーズをもつ子どもを育てる母親の次子妊娠における体験も明らかにする必要がある。

現在、家族計画支援が行われる産褥入院中は母親にとって、子どもが NICU へ入院したことへの自責やショックを抱く時期である⁸⁾。そのため、産褥入院中に医療者は十分な家族計画支援が行えていない可能性が考えられる。しかし、子どもが NICU に入院する場合、母親自身が妊娠合併症を経験していたり、子どもが疾患をもつ場合が多く、個別的に次の妊娠に関する支援が行われている可能性が考えられる。また、NICU で新生児科の医師や看護師、または退院後の産婦人科外来や小児科外来の医師、看護師が次の妊娠に関して支援を行っている可能性もある。しかし、NICU に入院した子どもをもつ母親に対する個別的な支援が行われているかどうかや、支援が行われている場合どのような支援が行われているかは明らかにされていない。母親への支援を考案するために、わが国で行われている次子妊娠への支援の現状を明らかにする必要があると考える。

また、母親への情報提供のあり方として、米国には早産児の両親に向けた書籍に次子

妊娠に関する章が設けられている⁷⁾。この書籍では、早産児の母親が、次子妊娠を決定する過程で早産を体験した母親特有の感情に対処できるよう、体験談を中心とした情報提供が行われている。わが国においても、NICU に入院した子どもをもつ母親の身体的・心理的特徴をふまえた次子妊娠に関する情報提供のための冊子を開発することで、母親が時や場所を選ばず、また特別な設備を必要とせず、情報を入手することができると思う。

引用文献

- 1) 加藤春子, 国村美由紀, 八矢美幸, 又村光子, 伊藤幸枝(1999). 第3子以上を出産した親の諸要因の検討地域差の観点を中心に. *母性衛生*, 40(4), 383-390
- 2) 中山和美, 星山佳治(2001). 出産経験者における出産に対する意識ライフコースの視点から. *母性衛生*, 42(1), 222-229
- 3) 斎藤益子, 木村好秀(2009). 家族計画. In 横尾京子 (Ed.), *助産師基礎教育テキスト第6巻 産褥期のケア 新生児期・乳幼児期のケア* (pp122-134). 東京: 株式会社日本看護協会出版会
- 4) 船場友木, 横尾京子, 福原里恵(2011). 子どものNICU入院による母親の次子願望への影響. *日本新生児看護学会誌*, 17(2), 9-14
- 5) 横尾京子, 田中都代子, 時安真智子(1995). 超未熟児を出産した母親における次子妊娠・出産の意思決定と援助. *母性衛生*, 36(2), 298-304
- 6) Schaaf, J.M., Bruinse, H.W., Leeuw-Harmsen, L., Groeneveld, E., Koopman, C., Franx A., & Rijn B.B. (2011). Reproductive outcome after early-onset pre-eclampsia eclampsia. *Human Reproduction*, 26(2), 391-397
- 7) Davis LD., & Stein TM. (2004). *Parting Your Premature Baby and Child The Emotional Journey*. USA: Fulcrum Publishing.

2. 研究の目的

- 1) NICU に入院した子どものうち在宅での医療を必要とする子どもの母親の次子妊娠決定における経験を明らかにする
- 2) NICU に入院した子どもをもつ母親に行われているわが国の家族計画支援の現状を明らかにする。
- 3) 次子妊娠に関する情報提供の冊子を用いた看護方法を開発し、評価する。

3. 研究の方法

1) 研究デザイン: 質的研究

NICU に入院した子どものうち在宅での医療を必要とする子どもの母親の次子妊娠決定における経験を明らかにすることを目的に、NICU に入院した子どものうち在宅での医療を必要とする子どもの母親6名に面接調査を実施した。面接場所はプライバシーが確保でき母親が安心できる場所とし、すべての母親が自宅を選択した。面接内容は母親の許可を得て IC レコーダーに録音した。録音したデータを忠実に逐語録に起こし、質的記述的に分析を行った。

2) 研究デザイン: 量的研究

NICU に入院した子どもをもつ家族への次子妊娠支援の現状を明らかにすることを目的に、全国の総合医療センターに勤務する医師および看護師、小児の診療所や訪問看護ステーションで勤務する医師および看護師を対象に郵送法による質問紙調査を実施した。すべての項目について記述統計を行った。自由記載部分については類似性・相違性に沿ってカテゴリー化した。

3) 研究デザイン：ミックスメソッド

先行研究および1) 2) の結果をふまえて NICU に入院した子どもをもつ母親への次子妊娠に関する支援を開発した。支援を行う際に使用する冊子を作製した。支援の目標は、母親が次子妊娠の決定に必要な情報を入手し、入手した情報を活用して決定におけるニーズを解決できることとした。本研究で開発した支援は、次子妊娠における意思決定の準備を高める支援および、家族計画を実行するために必要な受胎調節に関する支援から構成した。意思決定の準備を高める支援は、オタワの意思決定に関する概念枠組み (Ottawa Hospital Research Institute, 2017) を参考に、価値の明確化、決定のニーズの明確化、事実や可能性の提供で構成した。家族計画を実行するために必要な受胎調節に関する支援は、家族計画支援、ハイリスク出産後の出産間隔から構成した。

本研究は、NICU を有する3つの地域周産期医療センターで8か月間実施した。研究対象者は、20歳以上で、子ども NICU に入院した母親のうち、同意取得時に子どもが生命の危機状態にない、次子妊娠が不可能ではない、精神疾患を有していない、出産した子どもが多胎ではない、離婚していない、NICU に入院した理由が母親の GBS 感染症、光線療法、低血糖治療のためでない母親とした。

研究期間のある4か月間の間に出産し子どもが NICU に入院した母親を従来のケアを受ける群、別の4か月間の間に出産し子どもが NICU に入院した母親を本研究で開発したケアを受ける群とした。

家族計画支援は両群ともに、産褥入院中の分娩後3~5日目にケアを実施した。

従来のケアを受ける群は、各施設でこれまで行われてきた家族計画支援を行った。施設間で実施内容、実施時期、実施方法、実施者に大きな差異がないことを事前に確認した。各施設で利用されている冊子を使用した。

本研究で開発したケアを受ける群は、各施設で、本研究で開発した支援を行った。ケアの同質性を担保するために、共同研究者となる各施設の看護師を対象に事前説明会を開き、実施内容、実施方法について説明した。支援を行う際、対象者が次子妊娠に対する考えや思い、ニーズを明確にできるよう、説明だけでなく、母親の思いを聞くことを心掛けるよう説明した。

実施前に性成熟期女性のヘルスリテラシー尺度および研究者が作成した質問紙調査

を実施した。一か月健診で事前調査と同様の質問紙調査および面接調査を実施した。面接調査は一人約10分とした。

量的データは記述統計を行い、t検定、²検定、Fisher の正確検定、Wilcoxon 順位符号検定を行った。質的データは逐語録を作成し、内容分析の手法を用いてカテゴリー化した。その後、量的データと質的データを統合した。

4. 研究成果

1) 6名の母親はNICUに入院が必要な子どもの出産後3~6年が経過していた。4名の母親が次子妊娠を決意し、3名が出産後であった。母親の経験から【次子に対する考えの変化】【次子をもつかどうかの熟考】【次子を持つことに対する異なる感情への折り合い】【次子妊娠の決定】の4つのテーマクラスターが抽出された。【次子に対する考えの変化】は、医療的ケアが必要な子どもや、障がいのある子どもをもつことで、これまで望んでいた次子をもつことで、次子に負担をかけることになるとはならないかという思いや、逆に子どもの将来を手助けしてくれるきょうだいが必要ではないかという思いを抱くようになることである。これは、本研究で対象とした医療的ケアを必要とする子どもの母親に特徴的な体験であった。

母親が次子妊娠について決定する過程で必要な支援として、似た境遇の母親の体験談や、利用できる公的資源の必要性が示唆された。

2) 配布した631通のうち215通の返信があり(回収率34.1%)、そのうち、未記入の項目が1つ以上あった32通を除き183通(有効回答率85.1%)を分析対象とした。

医師や看護師の92.9%がNICUに入院した子どもの両親が次子妊娠で悩んだり迷ったりする場面があることを知っていることと回答し、そのうちの83.5%が実際に悩んでいる母親にあったことがあると回答した。次子妊娠に関する相談にのった経験や、医学的知識の情報提供は約7割の医療職者に実施経験があった。妊娠合併症や子どもの疾患といった医学的な支援は医師および産科で勤務する看護師・助産師で支援経験の割合が高かった。体験想起や体験共有、社会資源の調整といった心理・社会的側面の支援は新生児科の医師やNICU看護師、小児科外来看護師、診療所医師、訪問看護師で支援経験の割合が高い傾向がみられた。

NICUに入院した子どもをもつ両親への次子妊娠支援を妨げているものとして、知識不足や時間的余裕・人手のなさがあることが明らかとなった。次子妊娠に関する支援を実施するために必要と考える方法としては、専門家との連携や、冊子などの媒体、ピアサポートとなる母親との連携の割合が高かった。また、約80%の回答者が、母親や家族から相談がなくても事前に、次子妊娠に関する相談に

のることや、次子妊娠での医学的な情報を伝えておくべきと回答した。

この結果より、多職種やピアサポートとなる両親が協働することや、情報提供の充実を含めた支援システムの構築の重要性が示唆された。

3)42名の母親をリクルートし、最終的に従来のケア群 11名、本研究で開発したケア群 19名を分析対象とした。

従来のケアを受けた群と、本研究で開発したケアを受けた群で性成熟期女性のヘルスリテラシーについては統計学的な差はみられなかった。

次子妊娠について考え始めた際に、医学的な情報を入手できると思うかどうかや、入手した知識や資源を活用した意思決定ができそうかどうかという項目で、本研究で開発したケアを受けた群で一か月健診時の得点が上昇する傾向がみられた。

面接調査の結果、母親の次子妊娠に関する考えとして【ためらいが出現する】【考えは変わらない】【今は考えられない】【トラブルにうまく対処できないかもしれない】【次子妊娠にうまく対処できそう】の5つが抽出された。このうち、【次子妊娠にうまく対処できそう】という語りは本研究で開発したケア群の母親からのみ抽出された語りであった。

量的な結果と質的な結果を統合した結果、【今は考えられない】【トラブルにうまく対処できないかもしれない】という語りをした母親は、そうでない母親に比べて、性成熟期女性のヘルスリテラシー尺度の得点が減少する傾向がみられた。また、【今は考えられない】と語った母親はそうでない母親に比べて、次子妊娠をどれくらい希望しているか、次子妊娠についてどれくらい決めているか、次子妊娠を考え始めた際に医学的情報をとれそうか、情報や資源を活用した意思決定ができそうかという項目の得点が減少する傾向がみられた。

本研究では量的データに統計学的な差はみられなかった。これは、一か月間という短い期間で評価したことやサンプルサイズの小ささによる影響もあると考える。しかし、本研究で開発したケアを受けた群の母親で、医学的な情報を入手できそうか、情報や資源を活用した意思決定ができそうかという項目の得点が上昇する傾向がみられた。質的データで本研究で開発したケアを受けた母親のみに【次子妊娠にうまく対処できそう】という語りが見られたことから、本研究で開発したケアが母親にとって有益である可能性が示唆される。また、本研究で開発したケアを受けた群の何人かの母親が、次子妊娠に関する話をする中で、看護師と今回の妊娠・出産に関する話や、子どもの状態に関する話をする事ができ、安心することができたと語っていた。従来のケアを行った看護師と本研究で開発したケアを行った看護師は同じであるにも関わらず、こうした差が出てきた

のは、これまでの一方的な説明とは異なり母親の思いや考えを共有する姿勢によるものとする。こうした信頼関係は、その後の次子妊娠の決定においても母親が医療者から情報を取りやすくなることにつながる可能性がある。

また、面接調査より、一か月健診時で多くの母親が次子妊娠に関する具体的なニーズを明確化していることや、次子妊娠に関する程度の態度を決めていることが明らかになった。一方で妊娠・出産へのショックから次の妊娠について考えられない状況の母親も存在しており、そうでない母親と比較すると、次子妊娠について考える過程での情報入手や、情報や資源の活用に関する得点が減少する傾向がみられた。この結果より、従来のように一律の時期に行うのではなく、母子の置かれている状況を加味し、柔軟にケアが行えるようなケアシステムの構築が重要と考える。

さらに、今回の妊娠出産で適切な情報を入手できない体験をした、または、医師や看護師とうまくコミュニケーションをとることができなかったと語った母親は、そうでない母親と比較すると、一か月健診時にヘルスリテラシー得点が減少する傾向がみられた。今回の妊娠・出産での体験が次の妊娠の意思決定プロセスでの情報入手や活用に影響を与える可能性がある。そのため、妊娠中から、妊婦が必要な情報を入手できているかどうかを共有していくことや、次子妊娠に関する支援を行う際に、今回の妊娠・出産で、情報の入手や共有という場面で母親がどのような体験をしているかを共有することの重要性が示唆された。

以上の結果より、本研究で開発したケアによって母親の次子妊娠の意思決定プロセスでの医学的な情報の入手や、情報や資源の活用に関する力を強めることができる可能性が示唆された。本研究では、研究参加を拒否する事例はほとんどなかったが、研究を行った時期に NICU への入院が少なくサンプル数が十分ではなかった。また、従来のケアを受けた群と、本研究で開発したケアを受けた群で背景に偏りもみられた。このことが結果に影響している可能性があるため、今後サンプル数を増やすことや、対象者の背景をマッチングすることが課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

松場友木, 小澤末緒, 藤本紗央里, 福島紗世, 大平光子: NICU に入院した子どもをもつ母親や家族への次子妊娠支援の現状 医師・看護師への質問紙調査から一, 日本新生児看護学会誌 23(1), 2017, 査読あり

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

船場 友木 (FUNABA, Yuki)
広島大学・大学院医歯薬保健学研究科・助教
研究者番号：70582378